

特集

クラウドファンディングを

活用した道内市町村の取組

クラウドファンディングとは

クラウドファンディング（crowdfunding）は、「群衆（crowd）」と「資金調達（funding）」を組み合わせた造語で、個別の事業やプロジェクトについて、インターネットを介して不特定多数の人々から資金を募る手法です。

このクラウドファンディングは、単なる資金調達としてだけでなく、事業の目的や内容に対して、多くの方々からの共感や賛同の獲得も期待できることから、自治体においても、産業振興や環境保全、子育て支援など幅広い分野において活用されています。

クラウドファンディングを成功させるためには、調達した資金を具体的にどのように活用し、役立てるのかを明らかにすることはもとより、多くの人々が魅力を感じるプロジェクトを構築することが重要です。

ふるさと納税とクラウドファンディング

個人の方が自治体に寄附を行う場合、寄附額の2000円を超える部分について所得税と住民税から控除される「ふるさと納税」制度の対象となりますが、自治体が主体となって実施するクラウドファンディングへの資金提供も、自治体への寄附となり、「ふるさと納税」の対象となります。

自治体主体のクラウドファンディングは、通常の「ふるさと納税」に比べ、寄附金の使途をより明確にするとともに、寄附受入の目標額と一定の募集期間を定めるといった特徴があり、「クラウドファンディング型ふるさと納税」とも呼ばれています。

クラウドファンディングの活用による地方創生

近年、道内の市町村においても地方創生の推進に向けた取組へのクラウド

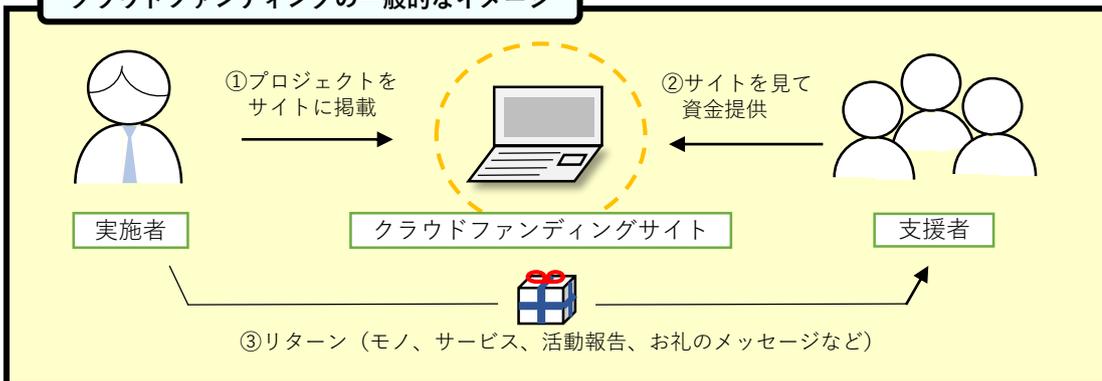
自治体主体のクラウドファンディングとふるさと納税の比較

用途	クラウドファンディング型ふるさと納税	通常のふるさと納税
用途	明確なプロジェクト	分野や施策
目標額	設定	-
募集期間	設定	-
税額控除	対象	対象

ファンディングの活用事例が増えてきており、市町村が主体のクラウドファンディングのほか、地域の企業やNPO等が実施するクラウドファンディングを側面支援し、そのプロジェクトを通じて地域の活性化を図るという事例も見られます。

今回の特集では、まちづくりにSLというシンボルの再生を取り入れた取組や、海鳥の繁殖する貴重な自然環境を守るための島内外での取組、廃校の危機にある高校の学習環境整備による魅力化の取組、民と官の連携による新たな特産品の生産・開発の取組を行ったクラウドファンディングの事例を紹介いたします。

クラウドファンディングの一般的なイメージ



室蘭市 SL再生の取組

SLの活用に向けて

室蘭市には、昭和38年に開設した道内最古の科学館として知られる「室蘭市青少年科学館」があり、この施設の敷地内に、かつて石炭輸送に使われたSL、D51-560号が昭和50年から屋外展示されていました。しかし、青少年科学館の老朽化等に伴う施設整備が進められたことにより、このSLを今後どのように活用するかが課題となり、移設にかかる経費や、現状維持の場合の施設整備への影響など、様々な事柄について検討しました。

室蘭市は、明治以来、本州への「石炭積出し港」として、戦前の産業近代化や、高度経済成長期を支えてきた地域であり、ゆかりの建築物として国の登録有形文化財となっている「旧室蘭駅舎」が現存しますが、こうした地域



まちづくり協議会のワークショップの様子



移設に向け運搬されるSL

の歩みをより広くPRする上でも、このSLを旧室蘭駅舎の隣接地に移設し、旧駅舎と一体的に活用しようと考えました。

市では「まちづくり協議会」という公募による市民ワークショップを行い、平成30年度にはSLをどのようにまちづくりに活かすのかをテーマとして開催しました。幅広い年齢層の方々に参加いただき、車両のライトアップや、メンテナンスのイベント化など多くのアイデアが出され、今回の車両移設の取組に反映しました。

取組と成果

SLに関心のある方や愛好家は全国各地に存在し、また、「石炭積出し港」室蘭の地域柄、ゆかりのある方が多く、こうした歴史的背景に基づいたSL活用の取組について、クラウドファンディングという形で全国に発信することで、資金面での支援を得るだけでなく、移設後の活用方策、そして室蘭市のSL以外の様々な取組についても、関心を

寄せてもらう契機になると考え、市として初のクラウドファンディング事業に踏み切りました。

この事業の内容について検討を進めるに当たり、単に車両移設自体への支援を募るだけでは、行政が行う事業の補填にしかならないため、より効果的に活用する上での付加的な整備を行うことを目標とした方が良いのではないかと考え、SL移設後における「SL車両のライトアップ」をプロジェクト化しました。

これにより、近隣地域はもとより全道・全国から暖かい支援をいただき、目標額の2倍を超える寄附が寄せられました。クラウドファンディングにより、SLの移設活用の取組に多くの方の関心を引くことができ、大きな成果となりました。

特に、地元室蘭の方々に、実際にSL移設事業に参画するという意識を強く喚起することができ、従来の行政の取組とは異なる成果が得られました。

集まった支援金は当初の予定どおり、移設後のライトアップに活用し、目標額を大きく超える部分については、支援の趣旨を鑑み、SLの保全上必要な車両の再塗装などの経費に充てました。こうして、令和元年8月23日、SLの旧室蘭駅舎横への車両の移設が実現しました。警備などの関係から日時等を公開しないことも考えましたが、今

回は地域の関心も高いため、警察をはじめ、関係機関と十分な連絡調整の上で沿道警備の体制を整え、移設日時を公開し、観覧を呼びかけました。当日は雨天にもかかわらず、市内近郊や全道各地から延べ560人が沿道で観覧する中で、昭和50年以来、44年ぶりとなるSL車両移設が無事終了しました。

課題・工夫した点

プロジェクト化に当たって、事業内容や目標金額の設定など、経験がなく、関心を示していただけるか見込みがつきにくく悩んだところでしたが、結果として多くの支援をいただきました。

支援への返礼品については、通常ふるさと納税の返礼にしている地元の特産品も検討しましたが、やはりこのプロジェクトでしか得られない品が良いと考え、SL移設時のポストカードセット、SLと旧駅舎のオリジナルパークラフト、現地の芳名版への掲載、



「SL仕上げのひと塗り」の様子

移設後の「SL仕上げのひと塗り権」など、このプロジェクトの記念となるものを設定しました。

反省点としては、支援受付が平成30年12月から翌年3月まで、SLを移設し、上屋工事等が終了し公開を開始したのが11月と、タイムラグが発生してしまい、さらに返礼等の対応もそれ以降となるなど、支援いただいた方々をお待たせしたことが挙げられます。

このSLは、昭和50年の科学館への移設以来、旧国鉄OB「機友会」の皆様メンテナンスを毎月実施いただけてきました。現在、会員数も減少し高齢化も進行する中、メンテナンスの手法を次代に受け継ぐため、市では、クラウドファンディングで向上した認知度を活かし、協力いただけるボランティア「D51（デゴイチ）ミガキ隊」を募集し、機友会の方々とともにメンテナンスにあたっています。



D51ミガキ隊による車両メンテナンス



移設後ライトアップされたSL

今後の展開

今回、移設整備したSLについては、まちの歩みを象徴する地域資源として、旧室蘭駅舎と一体で管理・活用していくこととしています。

石炭積出し港、そして鉄鋼業を中心としたものづくりのまちとしての室蘭市の歩みについては、日本遺産「炭鉄港」ストーリーの一部となっており、今回のクラウドファンディングによるSL移設も、この日本遺産認定に合わせた取組とすることができました。

また、旧室蘭駅舎やSLのほか、周辺の歴史的なスポットを巡る散策路整備にも取り組んでおり、今後も観光で室蘭を訪れる方や、地元の方にも地域の歩みを知っていただく取組を進めていきます。

（協力：室蘭市教育委員会生涯学習課）

海鳥の保護に向けて

海鳥繁殖地として知られる羽幌町の天売島は、100万羽の海鳥と人が共生する世界的にも珍しい生態系を持つ島ですが、近年一部の海鳥の生息数が減少しています。特に、羽幌町のシンボリックな存在であるウミガラス（オロロン鳥）は、かつて約8000羽ほどが生息していましたが、漁網による混獲やエサとなる小魚の減少などにより近年では100羽に満たない生息数になってしまいました。そのほか、ウミネコやウトウなどの海鳥のヒナを野良猫が襲ってしまうなどといった問題も発生しています。

多くの海鳥が繁殖する貴重な環境を残すには、天敵への対策といった直接的な保護活動だけではなく、地域の生態系全体を守る必要があります。また、そのためには自然を利用する私たちの暮らしや経済活動の取組など、あらゆる面で自然環境に配慮した地域づくりを進めなければなりません。



海鳥に優しい取組を評価し、それらを行う事業者を認証する制度



取組と成果

羽幌町では「環境保全条例」と「環境を守る基本計画」を策定し、環境に配慮したまちづくりを進めており、自然環境の保全に継続的に取り組むための資金確保と、羽幌町のシンボルでもある海鳥が暮らす天売島の自然環境を全国の方々に知ってもらうことを目的として、クラウドファンディングの活用を決めました。

町では、クラウドファンディングの取組を2018年から行っており、1年目はなんとか目標額を達成するような状況でしたが、2年目には、寄附開始の時期をふるさと納税に関心が集まる年末の時期に合わせて調整し、返礼品の種類を増やすなど、新たに心を持ってくれる方やリピーターを増やす



羽幌SBF協議会の様子



子ども海鳥観察会



葛西臨海水族園でのPR事業

羽幌高校と連携した啓発事業

協議会では、町外からの応援者を募る「SBFサポーター制度」もスタートさせています。この制度は協議会の活動を支援する方を認証するもので、町内外を問わずに、SBF認証制度や認証事業者の周知活動、寄附などによる制度運用への経済的支援、協議会が進める活動への人的・物的支援などを継続して行ってもらえる個人や団体を認証するものです。こうしてより広く取組について周知、支援がされるよう工夫しています。

また、海鳥が減少する一因とされる、野良猫への対策も行っています。この

ことなどにより、目標額を上回る金額を集めることができました。

集まった支援金は、首都圏でのPR事業（ジャパンバードフェスティバルや葛西臨海水族園への出展）の実施や、道立羽幌高校と連携した総合学習の時間における生物・環境調査や啓発事業の経費に充てました。「生物多様性の見える化」のための認証事業者の圃場周辺における自然環境調査の実施、一般向け学習会の開催など、様々な取組に活用できました。

課題・工夫した点

また、協議会では海鳥に優しい取組を行う事業者を認証する「SBF認証制度」を創設し、現在までに町内の4事業者を認証しています。

認証を受けた事業者は、販売する商品等に認証マークを表示することができます。



ボランティアによる野良猫の馴化と天売猫のてんちゃん



ケイマフリ(左)とウミガラス(右)

取組では、殺処分という手段を使わずに問題を解決することを目指しており、これまでに島の野良猫130匹を飼い馴らし、「天売猫」として123匹に新しい飼い主を見つけることができました。これにより島内の野良猫は減少し、生息数が減少していたウミネコの新たな集団繁殖地が形成されるなど、個体数が回復しています。

天売猫については、コロナ禍において、これまでのように譲渡会などを開催することが難しく、今後どのように猫を譲渡していくかという点、そして取組の成果をどのように周知していくかという点が課題となっています。

協議会の今後の課題については、認証事業者をどのように増やしていくかという点、天売島や焼尻島内の認証事

（協力：羽幌町役場町民課、地域振興課）

また、協議会では今後、制度の認証の範囲を羽幌町内だけでなく留萌管内へと拡大させながら自立を目指していきます。

また、協議会では今後、制度の認証の範囲を羽幌町内だけでなく留萌管内へと拡大させながら自立を目指していきます。

今後の展開

天売猫の譲渡の取組については、成果報告会の開催を検討しており、また島民の要望に応じて、札幌市内等の保護猫を紹介できるようなシステムを構築し、動物愛護の取組を行っていくことを目指しています。

業者がまだおらず、両島とどのように連携していくかという点、SBF認証の認知度の向上と認証された事業者の商品を消費者へどのようにPRしていくか、また、協議会の自立的な運営をどのように行っていくかが課題となっています。



譲渡先からの手紙の展示

譲渡会の様子